

狂言作者並木正三伝の周辺

廣瀬千紗子

はじめに

一 並木正三の追善戯作

二 『並木正三二代噺』の作者と板元

三 十三回忌正三追善本読会

四 本読会に集う人々

五 富山捲足と並木正三

十八世紀半ばの大坂道頓堀に生まれ育ち、四四年の生涯に一〇〇作以上の作品を書いた狂言作者の逸材、並木正三の伝記は、上演歴をまとめて、その十三回忌の天明五年に刊行された『並木正三代噺』に詳しい。いっぽう、同じく十三回忌追善に同業の作者たちが催した「正三述作の狂言」の本読み会の番組には『穴意探』の作者近松東南、当時の俄の名手、富山捲足らの名前が見える。いわゆる「大阪騒壇」の「類とおぼしき人々で、正三とは俄の同好の友であったらしい。『一代噺』に「入我園主人」が序文を寄せたのもまた、俄の縁で、正三の『大坂神事揃』は、まさに俄を趣向にした傑作であった。捲足について多くは未詳だが、明和七年刊『雷子改捲足改名祝賀句集』（仮題）には捲足を称える正三の句が知友五六人中、別格で入集する。ここに窺えるのは、道頓堀の賑わいの中で粹人たちと遊ぶ正三の姿である。正三伝の知られざる一面であろう。

はじめに

狂言作者並木正三は、享保一五年（一七三〇）、大坂道頓堀に生まれ、安永二年（一七七三）、同地で四四歳の生涯を終えた。正三についての伝記的な著作は、正三の十三回忌にあたる天明五年（一七八五）一月刊『並木正三代噺』が最も早く、かつ当時としては最も詳しい。江戸時代には本書を引用した演劇書を見かけるが、近代においても、一九四〇年代までに著された伊原敏郎¹、守隨憲治²、河竹繁俊³らの正三伝は、おおむね本書に依拠している。いわば『並木正三代噺』は、長らく正三伝の定番であったといつてよい。

一九七〇年代以降になると新たな動きが生じ、土田衛「近世の大阪歌舞伎へ四、爛熟の大阪歌舞伎―並木正三と舞台機構の改革」（毎日放送文化双書11『大阪の芸能』所収。一九七三）、守屋毅「大坂の劇団とその動向へ五節³、文運東漸期の歌舞伎」（『大阪府史』6巻、一九八七）が、一八世紀大坂の都市史、芸能史を視野に入れながら、正三の事跡を位置づけるようになる。そして、一九九一年、土田衛氏によって『並木正三年譜考 上・下』（『歌舞伎研究と批評』7・8号、一九九一年六月・一九九二年一月。以下「年譜考」と略す）が編まれるに及んで、正三伝は大

きく一変した。すなわち、この「年譜考」では、『並木正三代噺』が掲げる上演歴の先行研究はもちろんのこと、能う限り、番付・絵尽・台帳・評判記、その他の関連資料など、同時代の一次資料を根拠として、すべての記事が検証されているのであり、現在、正確かつ詳細な年譜として、この「年譜考」を越えるものはない。当然のことながら、今日から見れば『並木正三代噺』の記述に齟齬があるのはやむを得ないところで、これには訂正が加えられている。同時にまた、検証可能な記事については、本書に確たる裏付けを与えたという点においても、土田氏による「年譜考」の意義はきわめて大きいといえる。

そのことを踏まえた上でいえば、上演歴には表れない正三の一面も、もちろんあり、それは、正三をモデルとした浮世草子や、歿後の追善戯作の類に垣間見ることができ、その姿が直ちに作劇に結びつくわけではないが、正三の事跡の全容を知る一助として、目を向けておきたい。以下、文中の（ ）は廣瀬註。

一 並木正三の追善戯作

正三の在世中の名声は、役者評判記によっても知られるが、特筆すべきは、正三の芝居が注目を浴びたことによつて、とかく上方では、役者の陰に隠れがちな作者の存在に

関心が及んだことであろう。安永二年（一七七四）三月刊『役者清濁』京の巻に、いち早く訃報が載るのをはじめ

として、歿後には追善戯作がいくつか著されているのが際立つ。いずれも、すでに紹介したものはあるが、題名だけをおけると、その一は、冥途物語の浄瑠璃で、安永二年七月、北堀江市ノ側芝居、豊竹此吉座上演『南無三宝／正参追善／極楽往来蓮寄初』（豊竹此太夫、豊竹綱太夫）、正本屋小兵衛板、作者若竹笛躬の正本。二は、年次不明の写本『並木正三冥途旅立』。三は、無刊記の板本『並木正三不戻噺』。四は、天明五年二月、正三の十三回忌追善本読会の摺物で、『並木正三／述作之狂言 追善之本説 廿三日／廿四日 両夜番組』。五は、同じく十三回忌に刊行された正三の一代記、『並木正三一代噺』である。そのほかに絵尽しの体裁をとった役者の追善戯作で、安永九年刊と推定される、『三桝大五郎弘誓の乗込』にも作者として登場する。これらもまた、役者の最期物語や冥途物語などの戯作はあるが、作者については前例がないと思われる。小稿では右のうち、戯作ではないが追善の催しであった、四の本説会を通して、正三の一面を紹介する。それに先立って、『並木正三一代噺』の作者についても補足するとともに、改めて言及しておく。

二 『並木正三一代噺』の作者と板元

『並木正三一代噺』（以下、適宜『一代噺』）は、『日本庶民文化史料集成』第六巻「歌舞伎」（一九七三、三一書房）に権藤芳一氏による翻刻と解題が備わる。天明五年（一七八五）十一月、越前屋平兵衛・正本屋清兵衛刊。中本一冊。外題簽「並木正三一代噺」、内題「並木正三狂言攬」。内題に「狂言攬」とあるように、上演作品を年代順に配し、上演歴によつて正三の生涯が編纂されている。また、出生と臨終にもふれ、随所に短い逸話が挟まれているのも興味を引く。文中から外題が判明するか、もしくは推定できる演目は一〇五作品に及び、正三の十三回忌に全作品を網羅しようとした本書は、追善の最たるものといえるだろう。ちなみに巻末の年記に「昔 天明乙巳二月十七日」とあるのは正三の祥月命日である。

本書に作者の署名はないが、権藤氏の解題にも指摘されるように『享保』以後 大坂出版書籍目録（大阪図書出版業組合編、一九三六。複製版、一九九六、龍溪書舎）の天明五年、本書の項に「作者 並木千柳（油町三丁目）」と見える。並木千柳は並木宗輔（宝暦元年中歿）の別名であり、右の千柳は二世、前名並木翁輔である。この改名の一件を示すのが、天明四年三月刊『役者誉舞台』大坂巻、

「狂言作者之部」の記事である。⁽⁸⁾

藤川座

奈河亀助／翁輔改並木千柳／増山太郎／奈河七五三

輔／春樹元輔／並木巖蔵／小西周輔／長谷邑真七

天明四年、藤川菊松座（角の芝居）には奈河亀輔（助）

を立作者とする八人の作者がおり、翁輔はその一人で、このとき二世並木千柳と改名したのである。『並木正三一代噺』の板行は、その翌年のことであつた。

役割番付によれば、翁輔は宝暦四年（一七五四）、同六

年、同八年から一一年に正三と同座しており、この間に

『道中千貫樋』⁽⁹⁾（宝暦四年二月一日、嵐三右衛門座）、

『天竺徳兵衛聞書往来』⁽¹⁰⁾（宝暦七年一月二日、大松百助

座）、『四天王寺伽藍鑑』⁽¹¹⁾（宝暦七年四月五日、大松百助

座）、『三拾石 艦 始』⁽¹²⁾（宝暦九年四月十日、中山文七座）、

『大坂神事揃』⁽¹³⁾（宝暦九年八月一日、中山文七座）、『霧太

郎天狗齋』⁽¹⁴⁾（宝暦十一年一月一日、中山文七座）などに

携わっている。いずれも話題作であるが、特に後半の三作

は、世間の意表を衝いた構想と、大掛かりな「せり上げ」

「引き道具」へ回り舞台」を駆使した演出で、大いに人の

目を驚かせた。この間は正三の二五歳から三二歳までにあ

たり、まさに前半生の絶頂期といつてよい。宝暦一二年

（一七六二）以降、翁輔は正三と同座することはなかった

が、著者に関して本書の序文には次のようにいう。

何人の著作にや、友なりける人、幸いに此草を得させ

しかば、机上に閱しするに、其ぬし戯場に勤仕のはし

めより、終焉を異にせざるの操、篤実にあやしからず。

物くるおしからぬ、さへのたくましきを、そこはかと

なく、ねもころにあかせしは、くきやうの追薦（究竟

の追善、カ）

すなわち、「其ぬし」の、「戯場に勤仕のはしめより、終

焉を異にせざるの操」の「篤実」をいい、正三の事跡を懇

ろに明かせしは、究極の追善であると。翁輔は竹田治蔵、

並木十輔、並木五瓶とも合作した有能な作者で、浄瑠璃作

品にも携わつて、寛政末年まで劇作を続けるが、正三にと

つては、その終焉まで昵懇の門人であつたらしい。

序文の署名には、「入我園主人」とあるが何人かは不明で

ある。『戯財録』（写本、享和元年秋成立⁽¹⁵⁾）の著者、「入我

亭我入」（二世並木正三）の号に類似するが、いずれも、

如來との仏我一体の境地をいう仏語「入我我入」にもとづ

くものであろうし、また、それゆえにどっち付かずという

謙辞でもあり、筆名にはふさわしかろう。たとえば、天明

元年十月七日、竹田新松座上演の、『檻樓錦今様織留⁽¹⁶⁾』の

正本の一本には、奥に「作者 入我園我入 長谷川夏秋」

とある由。原本未見だが、これまた類似の「入我園我入」

であり、同定しがたいところである。¹¹⁾

むしろ、手がかりは序文の冒頭にあり、

今年、如月中の七日は当正軒か十三回忌にして、わな
みも共に庭神楽の寄合。金毘羅の文弥ふしになつミ、
席キにすゝミし交りの深きをもて、泉下の手向けにと
ハ思ほゆれど

という。「庭神楽」とは当時流行の大坂俄で、この年の二月一七日、十三回忌には俄の寄合があつたとも読める。安永四年六月刊『古今俄選』巻之一に、俄の由来を説いて天鈿女の俳優にこじつけ「今の水無月の俄も、すなハち、神いさめの為也。古人曰、庭神楽なり」と、洒落て言うのである。正三は俄の作り手でもあり、寛延のころ、おそらく二十歳前後であろうが、外科の膏葉箱に扮した俄が、「道頓堀扇屋久太郎、後正三といふものゝおもひつきにて、非情のものに、ものをいわせし、はじめとぞ」と同書にいう。道頓堀扇屋は正三、幼名久太の生家である。

「入我園主人」は、正三とは俄の「交りの深き」縁で序文を求められたのであろう。『大坂神事揃』をはじめとして、『幼稚子敵討』(宝暦三年七月一五日、三柵大五郎座)、『惟喬親王魔術冠』(明和三年三月二四日、三柵大五郎・中村歌右衛門座)、『近江源氏駱講釈』(明和九年三月二五日、市山助五郎座)など、正三作品に俄の趣向を用

いた一群があることは、荻田清氏の論考に詳しい。¹²⁾

さらに、板元について付言すると、合板の越前屋平兵衛は『一代噺』以外に天明六年(一七八六)正月、役者評判記『三国舞台鏡』上下二冊を、同じく正本屋清兵衛と合板で板行しているほかには、確かな板行書が見当たらず、経歴未詳である。¹³⁾しかしながら、興味深いことに、正本屋清兵衛は、明和九年(一七七二)五月以前に半井金陵『当世芝居氣質』五巻五冊の出版を大坂本屋仲間に出願し、文章に差支えがあつて、六月に差し戻されている。¹⁴⁾一方、現存する『当世芝居氣質』は四巻四冊で、安永六年(一七七七)正月刊。板元は京都の菊屋安兵衛である。本書は出版後、一旦差し戻されたが、なお何度かの申し送りの末に、板元が京都の菊屋に移り、ようやく安永六年に板行に至つたのである。詳しい経緯は拙稿(正木ゆみ氏との共著)に述べたが、板元が京都の菊屋に替つたのは、安永五年と考えられる。

『当世芝居氣質』は、当時実在の演者や作者をモデルとして、幕内の事情を穿つ浮世草子で、巻四の一「作者の一巻をさづかりしヒウドロくの仕組」は作者の苦勞、作劇の苦心を描く。ここに登場するのが「波木宗左」こと並木正三で、正三は弟子の「滝田治蔵」こと竹田治蔵に、「先師並木宗輔口授の異見」として「名作者の性根魂」を開陳

する。ここには宗輔を介して正三をも名作者として顕彰する意図が明らかであり、作劇においては、名作者でさえ役者の我俣に振り回されて蔑ろにされるような、幕内の実態が暴露される。また『当世芝居気質』の作者半井金陵が、実は狂言作者並木宗治と同一人であり、かつ正三の助作者であったことも、右の拙稿で明らかにしたとおりである。

宗治は明和四年から九年まで並木正三と同座し、役割番付の「狂言作者」欄に名を連ねている。偶然かもしれないが『当世芝居気質』と『並木正三代噺』の作者は、両作ともに、正三の門人ともいふべき助作者である。また板元が替ったため、その名は表に出なかったが、元来は両作ともに、正本屋清兵衛が出版するはずであった。委細は不明ながら、ここには並木正三一をめぐって、幕内と板元との連携も推測されるのである。

三 十三回忌正三追善本読会

前置きが長くなったが、新たに正三伝を補足し得る一件について検討しておく。天明五年二月、実際に催されたかどうかは確かめられないが、正三の十三回忌を追善する本読みの会の記事が『攝陽奇観』巻三十八（『浪速叢書』4巻）にあり、「一、故人並木正三追善歌舞妓作者打寄本讀会といふ事を興行ス」という。あわせて見開き二頁全面に、

この本読会の摺物の模写が掲載されている。摺物の題は紙面の記載により『並木正三／述作之狂言 追善之本讀／廿三日／廿四日 両夜番組』としておく。この摺物に関しては、土田衛「年譜考」の天明五年に、

元の摺物は吉永孝雄氏がご所蔵になっているが、『浪速叢書』に納められている番組は、原本の影印ではなく、忠実な模写で誤りはない。また献句の翻刻も正しいので、これも再録は省略する。

とされている。ここに言われる『浪速叢書』は、同叢書4の『攝陽奇観』巻三十八を指す。この番組は原本の「忠実な模写」のまま掲載されているので、既知の内容ではあるが、次に翻刻しておく。「献句」については、掲載の現況より察するに、番組の裏面にあると判断されるので省略する。

なお、吉永孝雄氏旧蔵の摺物は未見で、現在の所在は把握できていない。演目上の○数字は、私に付した通し番号である。

〔翻刻〕

並木正三／述作之狂言 追善之本読

廿三日／廿四日 両夜番組

①井手の下紐 本よミ 並木十輔

②三十石 同 並木翁助

- ③天羽衣 本よミ 惣作者かけ合
 - ④鞍講釈 同 竹本三郎兵衛
 - ⑤ひがし山どの 同 奈川七五三助
 - ⑥幼年敵討 本よミ 惣作者掛合
 - ⑦天竺徳びやうへ 同 奈川亀助
 - ⑧しつへい太郎 同 為川宗助
 - ⑨天狗酒盛 本説 惣作者かけ合
 - ⑩まつりそろへ 同 近松徳叟
 - ⑪桑名や徳蔵 同 並木五兵衛
 - ⑫よとやばし喧嘩 本よミ 惣作者掛合
 - ⑬めかりの神事 本よミ 惣作者かけ合
- 右之外悲意の衆中、手向として
- 三曲 琴 雲衆
 - 胡弓 自緩
 - 尺八 萬栄
- 所作事 富山捲足
管弦 近松東南
浄るりふしこと
- 三絃 市山志山
- 右、本説ニ歌三絃鳴物はやし相加へ、并ニ諸芸
両夜共相替、外ニスケ罷出、奉御覧ニ入候 以上
巳二月吉日

千種万歳樂 叶 (以上)

右の番組にみるように、会場は不明であるが、正三の門人を中心とする同業の作者連中が集まり、祥月命日に近い二月二十三日、二十四日の両夜にわたって「並木正三／述作之狂言 追善之本説」なる催しが開かれた模様である。このとき読まれたのは次の一三作品で、役割番付によって、外題・上演時・座・作者を補うと、次のようになる。⑤⑫には正三の名前が見えないが関与したことが確実である。(注(16)参照)。外題の下は番組通りの読み手である。

- ①「大和国井手下紐」並木十輔。
- 寛延二年二月一三日、三栴大五郎座(大西芝居)。
- 泉屋正三／高木里仲。
- ②「三拾石船始」並木翁輔。
- 宝暦八年二月二二日、中山文七座(角の芝居)。
- 並木翁輔／松田百華／並木正三。
- ③「けいせい天羽衣」惣作者掛合。
- 宝暦三年二月一八日、三条定助座(大西芝居)。
- 松田百華／並木佐五郎／並木正三／沢村庄左衛門。
- ④「近江源氏鞍講釈」竹本三郎兵衛。
- 明和九年三月二五日、市山助五郎座(中の芝居)。
- 奈河亀輔／小川新蔵／並木正三／並木利助／並木周蔵。
- ⑤「東山殿女狩」奈川七五三助。

明和七年二月二日、藤松三十郎座（角の芝居）。

長谷川真七／青木善治／堺谷善平／並木宗治／山口文蔵。

⑥ 「幼稚子敵討」惣作者掛合。

宝曆三年七月一五日、三桝大五郎座（角の芝居）。

並木正三／桂門三。

⑦ 「天竺徳兵衛聞書往来」奈川亀輔。

宝曆七年一月二日、太松西助座（大西芝居）。

松田百花／榊山勘助／並木翁助／並木正三。

⑧ 「竹篔太郎怪談記」為川宗助。

宝曆一二年七月一五日、中山文七座（角の芝居）。

市山卜平／並木利助／並木正三／柴崎源蔵／松田百花。

⑨ 「霧太郎天狗醜」惣作者掛合。

宝曆一一年一月一五日、中山文七座（角の芝居）。

並木翁輔／松田百花／並木正三。

⑩ 「大坂神事揃」近松徳叟。

宝曆九年八月一日、中山文七座（角の芝居）。

並木翁介／並木正三／松田百花。

⑪ 「桑名屋徳蔵入船物語」並木五兵衛。

明和七年一二月二七日、小川吉太郎座（中の芝居）。

並木十輔／三升文次／並木莊次／並木利介／並木正三

⑫ 「淀屋橋喧嘩」惣作者掛合。

明和七年四月一日、藤松三十郎座（角の芝居）。

為川宗助事並木周蔵／山口文蔵／青木善治／長谷川真七

／並木莊治／堺谷善平。

⑬ 「日本第一和布刈神事」惣作者掛合

安永二年三月一六日、中村歌右衛門座（中の芝居）。

故人並木正三／寺田兵蔵／奈川文蔵／並木利助／小川新

蔵／奈河亀輔。

ここに寄り集まったのは、掲出順に、並木十輔、並木翁

輔、竹本三郎兵衛、奈河七五三助、奈河亀輔、為川宗助、

近松徳叟、並木五兵衛の八人の作者であり、③「けいせい

天羽衣」、⑥「幼稚子敵討」、⑨「霧太郎天狗醜」、⑫「淀

屋橋喧嘩」、⑬「日本第一和布刈神事」の五作品は「惣役

者かけ合」ならぬ、「惣作者かけ合」で読まれている。お

そらく、上演に近い形で、役ごとにせりふの応酬をしたの

であろう。¹⁷

右のうち、正三と同座しているのは、①並木十輔、②並

木翁輔、⑤奈河七五三助、⑦奈河亀輔、⑧為川宗助の五人

である。⑦奈河亀輔、⑪並木五兵衛（のちに五瓶。江戸へ

下る）は正三の歿後に立作者として大成し、⑤奈河七五三

助、⑩近松徳叟も亀輔、五兵衛のもとで重きをなした。亀

輔はまた本説の名人といい、「戲場狂言正本講釈」に定評

があったという¹⁸。彼らが天明期以降の上方歌舞伎を牽引し

たのは演劇史上周知であり、ここには詳述はしないが、①

の並木十輔は、前名、桂の吉時代から若き正三と同座し、②の並木翁輔は先述の二世並木千柳、⑧の為川宗助は、明和七年四月から九年秋まで並木周蔵と名乗り、以後元に復す。この期間は先述の並木宗治の同座時代と重なる。また『戯財録』には、正三方にながく寄宿していたともいう。

④の竹本三郎兵衛は、宝暦／＼明和期の浄瑠璃作者の名前であつたが、天明四年以降は別人の狂言作者で、これも『戯財録』に、島之内の富田屋市右衛門の妾腹といい、元祖竹本三郎兵衛の別家と伝える。富田屋市右衛門は当時著名な料理茶屋で、通称「富市」。寛政七年三月刊『役者時習講』に所在地と紋提灯が載る。ちなみに『一代噺』の末尾で病中の正三が、二の替の外題を「日本第一和布刈神事」と決め、内談のため座本の中村歌右衛門を訪ね当てた先が「折ふし富市方にて 道頓ほり名代の／＼りやうり茶や也 御屋敷方の振舞の座」であつた。

①から⑬までは上演順というわけではないが、いずれも話題作である。このほかにも佳作はあり、この時の選択の目安は明らかではないが、正三と同座し、のちに大成する同時代の有能な作者を選んだ一三作という点では、意味をもつものであろう。なお、①「大和国井手下紐」は正三の前名、泉屋正三時代の初期の代表作、⑬「日本第一和布刈神事」は絶筆となつた作で、正三自身は上演を見る事がな

かつた。一三作の中でこの二作の位置は、番組の巻頭・巻軸として配列されたものと思われる。

以上は、正三と同業の作者だが、「右之外懇意の衆中、手向として」、さらに六人が参加している。彼らは「本説」に「歌、三絃、鳴物、はやし」を添え、「諸芸」を以て「両夜」とも賛助出演しているのである。この「懇意の衆中」とは誰であろうか。

四 本説会に集う人々

琴の「雲衆」、胡弓の「自緩」、尺八の「萬栄」の三人については未詳。あるいは、この両夜ばかりの号であつたかもしれない。所作事の「富山捲足」、管弦の「近松東南」、浄瑠璃節事三絃の「市山志山」の三人は、かつて中村幸彦氏が提唱された、いわゆる「大阪騒壇」の人々の一類として、正三との接点をもつようである。「大阪騒壇」とは、宝暦一三年（一七六三）刊の洒落本『列仙伝』に集まる人々を、「詩人をいう騷人、詩壇をいう騷壇の語の意味を、拡張して、この風流人の集合を称する」の謂いであり、実名ではなく「モデル小説的変名で示されている」という²¹。

順序は変わるが、まず、管弦の近松東南から検討する。近松東南は浄瑠璃作者で、井口洋氏が紹介された、芝居の冥途物の戯作、明和七年（一七七〇）一月刊、『穴意探』

にいう。²²⁾

近来の作者なれど、三絃は段切に妙手をふるい、近くは振袖天神記に琴をもつて鳴る。彼是芝居に功有事、かぞふるに暇有らず。亦、俄は家の芸にして年々六月江南に我を忘る。

三絃、琴に長じ、俄に興じて、六月の住吉神社祭礼(後述)には「我を忘る」ような作者である。東南は実は、ほかならぬ『穴意探』の作者の一人でもあり、序には「作者浪華 東鱗□(印記)」、巻末の印記に「両鈍齋之印」とある。この「東鱗」について、井口氏は不明とされたが、東南の「東」と麦鱗の「鱗」の一字ずつを合わせた二人の号と見てよく、印記の「両」の意味とも符合する。麦鱗は、浄瑠璃作者松田ばく、俳諧では岡西律中、洒落本作者外山翁、また蘇生庵ほか、多くの号を持つ。²⁴⁾『穴意探』では、正三は並み居る作者、芝居の重鎮たちの中に「歌舞妓第一のきれ者」として、おもむろに登場する。その風貌は次のごとくである。

衣裳びゞ敷、緋縮緬の羽織に正の字の縫紋。小男なれど眼するどく、阿波や讃岐はおんでもない事、朝鮮貴にも行きかね顔つきにて、お座敷へぞ通りける。

明和七年と言えば、正三の四一歳のころである。「緋縮緬の羽織に正の字の縫紋」は、『一代噺』の口絵に描かれ

た正三像に等しく、座摩の一座を率いて、「阿波」へ行つたことは『一代噺』に見えており、「讃岐」に赴いた形跡もある。「朝鮮貴にも行きかねぬ」とは『天竺徳兵衛聞書往来』を想定してのことであろう。

浄瑠璃節事三絃の市山志山は、明和八年刊『新刻役者綱目』巻三、「〇三ヶの津立役評」の「〇市山助五郎 二代志山」である。その評文を次に掲げる。

大坂道頓堀芝居で太鼓を打たれる事も有し。其砌、鳴之内足代やといへる方へ養子に行き、其後別宅して、三味線ハ大西藤蔵の弟子となり、大西長蔵と名乗、竹本しばるへも暫出勤せられ(下略)

「足代や」は当時盛業中の島之内の茶屋、足代屋長左衛門²⁵⁾であろう。三絃に長じ、宝暦七年二月から同九年二月まで、師の大西藤蔵について、竹本座の三味線に出動していた。²⁶⁾また、明和八年一月から明和九年中は中の芝居の座本で、作者に並木正三、奈河亀輔、並木周蔵を擁し、立役に藤川八蔵、市野川彦四郎、実悪に中村歌右衛門、若女形は中村喜代三郎という強力な布陣を敷いた。この陣容で上演されたのが、正三晩年の大作、明和九年一月一〇日『千世界商売往来』である。助五郎はまた、正三の臨終に、「いせや又右衛門、大村屋九八、中村歌右衛門、市山助五郎皆々多年の親友なれば早速かけ付た」(『一代噺』)とい

う、親友の一人であった。

さて、所作事の富山捲足については、これまでほとんど言及されたことがないが、井口洋「浄瑠璃作者黒藏主―『風月外伝』をめぐる―」（『国語国文』一九七一年一月）に引用される、明和八年一二月刊、拳角力作法書『風月外伝』の一文の中に、わずかにその名が見える。本書は上下二巻。上巻内題下に「浪華 菊社 波高述」とある。波高は拳の結社、菊組を率いる名手で、拳の普及のために本書を上梓するにあたっては、菊組同人、拳の同好、茶屋、役者など、一八〇人ほどが祝儀の句を寄せており、下巻はその句集である。引用されたのは、その中の前書きと一句である。

捲足のあし、波高のよひと漁焉子の題跋さるゝと也けり。足や夏のニワカに妙をあらはし、指や冬の会に威をふるふ。いつれ江南の名家、学て及ふへからす。若其及ふものハ必ず粹ならむ。

冬にいさむ仙人びんぼうつよし指相撲

時々夢齋

「時々夢齋」は未詳。右は漁焉子こと上田秋成が、捲足の足技、波高の指技を称賛して『風月外伝』に跋を書いたことをいうが、今ここで注目すべきは、「足や夏のニワカに妙をあらはし」である。俄は享保のころ、住吉祭りの参詣帰りに、酔客が戯れに、酒樽を提灯に見立て踊り歩いた

ことに発し、以来、住吉神社の六月の祭礼へ荒和大祓あらいじおほはらえには、「御はらいのうちは、とり分芝居側住九より角ト丸迄の間、俄の本ン舞台」（宝暦七年カ、外山翁『浪華色八卦』、洒落本大成第二巻所収）となった。住九、角丸は道頓堀の茶屋。後述するように、捲足の足技は、しばしば衆目を集めたようで、まさに足を捲くがごとく超絶の技は、俄の場で披露されたのである。俄は夏の屋外の技、拳は冬の屋内の技である。捲足、波高とともに道頓堀の賑わいを先導する「江南の名家」であった。井口氏は、秋成の跋に「捲足波高」とあるのを一語、よって一人とみなし、「別人のことではなかった」とされたが、足と指、夏と冬が対になってるので別人の二人である（同氏の所望により、ここに訂正する）。

五 富山捲足と並木正三

この捲足には、明和七年九月序・跋、「雷子改捲足改名祝賀句集」と仮題する刊本一冊が備わり、天理大学附属天理図書館綿屋文庫（わ157/75）に蔵される。元表紙などを欠き、書名は不明だが、序文の末尾に「明和七寅季秋 東南 戯作／花桐四声 画□（印記）」とあるによつて、近松東南の著。東南は先述の『穴意探』の作者で、本説会では管弦を奏している。挿絵の「画」者、花桐四声は若女形

の三世花桐豊松、四声はその俳名で中ウ芝居の花形である。本書は仮題にみるごとく、雷子が捲足と改名した祝賀に寄せられた句集で、茶屋、役者、俄の知友ら五六人の句と、各人に添えられた挿絵から成る。

序文の冒頭に「道頓堀に雷子あり。川東に雷子あり」という。道頓堀の雷子は寛保二年常夏月（六月）、鳴神のある日に産声大にして誕生し、「雷子」と名付けられた。一方、川東、四条河原の雷子こと、二代目嵐三五郎は美男で、当時京都の女中方に人気があったが、俳名が雷子で紛らわしい。嵐三五郎が「今よりハ雷子の文字を来芝と書んか」といえば、「イヤく、手前が改めん」「イ、ヤワれらが」「イヤ拙が」と双方譲り合いになり、結局、大坂の雷子が捲足と改名することで落着いたのである。その二人の「誠と誠を尽せし」ことに感じて、東南の序文にいう。

思へらく此の富山氏ハ頗の雅物にて全く嵐が風流に似んことを欲するにあらず。とりわき此人多能にして、磨に工ミをなす手利也。扱足利也。又此足の奇なる事、目を驚かせ魂を飛すの妙曲也。今其足徳を以て名家より捲足の名を給ハる（下略）

富山氏は「頗の雅物」にして「多能」であり、「手利」「足利」と絶賛し、「足徳を以て名家より捲足の名を給ハる」という。本書中の三好松洛の句に、蹴鞠に懸の柳の図

を添えて「飛鳥井に見せばや足の菊自慢」とある。これが机上のことではなく、もしも名前を賜った名家が京都の公家で蹴鞠の家、飛鳥井家であれば足技の縁ではあろう。なお「菊」は「鞠」と「利く」を掛け、本書上梓の九月にちなむ。同様に市野川可慶こと市野川彦四郎の句にもいう、

（上略）さて貴尊先生より捲足と改名させ給ふ。いと
もかしこし。此人、常に舞伎を好ミ、立舞ふ時足に妙
有事、囃し賀して曰、

雷の音も秋に和らき狸々舞 市野川可慶

やはり「貴尊先生」に信憑性はありそうである。「此人」、立舞う足捌きに妙があり、狸々舞は秋の夜に「白菊の着せ綿を温めて酒を」汲んで舞う舞である（謡曲「狸々」。本説会では、富山捲足が「所作事」で興を添えた所以であろう。また、東南の句もあり、「予三絃をとれハ、捲足、爰にとして舞はしむる／山雀に押親もありうかれ鳥 近松東南」という。捲足、東南は、日頃から舞と三絃の相方となる好事の友であったらしい。

この句集には、並木正三も別格の扱いで、「ハレ冷しや名はけんそくて首領也」の句を寄せている。「けんそく」は「眷属」を掛ける。挿絵は雷雲の下に舞う足のみ首領、すなわち捲足。うしろには、俄の眷属の足を引き連れていゝ。首領の足には「大將いさみの段切、足ともうたへく」

と添える。寛保二年生まれで、正三より一二歳若い俄の名手に対する、大いなる祝辞であろう。なお、志山にも「咲ける其色久し秋の花」の句がある。ここに、本説会の「懇意の衆中」である、富山捲足、近松東南、市山志山の三人と、正三との間柄が明らかになったかと思う。「大坂の俄は元来、素人の芸であることが本領で」享保から天保まではそれが守られた。正三の周辺には、そのような粋な素人との、存外自在な往来があったようである。

本来ならば、「雷子改捲足改名祝賀句集」についてこそ、検討を進めるべきところであるが、すでに紙数が尽きた。本書については稿を改めたい。

注

- (1) 伊原敏郎『日本演劇史』第三編十一章「脚本と其の作者」一九〇四、早稲田大学出版部、七〇五〜七二頁。
- (2) 守隨憲治『近世戯曲研究』「時代歌舞伎に現れる女性」・並木正三の力作『大坂神事揃』・並木正三「脚本年表」一九三二年、中興館、四〇四〜四三九頁。のち『守隨憲治著作集』第一巻、笠間書院。守隨憲治『歌舞伎序説』「歌舞伎作者略伝、廿五、並木正三」一九二四、改造社、二一九〜二二頁。のち、同第三巻。
- (3) 河竹繁俊『歌舞伎作者の研究』四章「並木正三」一九四〇、東京堂、五五〜九〇頁。その後、河竹繁俊『日本戯曲史』「ジャンル別日本文学史Ⅱ」「第二次完成、大成期」に正三

を取り上げている。一九五四、南雲堂桜楓社、三八四〜四〇七頁。

(4) 廣瀬千紗子「並木正三の追善戯作をめぐって」熊倉功夫編『遊芸文化と伝統』所収、二〇〇三、吉川弘文館。

(5) 廣瀬千紗子「並木正三不登噺」翻刻と解題『藝能史研究』一五九号、二〇〇二年一月。

(6) 『上方役者一代記集』上方藝文叢刊11、所収。一九七九、中尾松泉堂。

(7) 文中「月山の肝取」とあるのは、竹田芝居の『神使嫁入小鍛冶』と判明した。安富順『神使嫁入小鍛冶』覚書き』『歌舞伎研究と批評』24号、一九九九年一月。なお「並木正三一代噺」(権藤芳一執筆、日本古典文学大辞典、岩波書店)に「また作品の年代順の羅列が主で、伝記としては物足りないうという評価もある」ともいう。

(8) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館所蔵マイクロフィルム版『役者評判記』による。請求番号「ロ11/1366」

(9) 「並木翁輔」(内山美樹子執筆、日本古典文学大辞典、岩波書店)に「天明四年(一七八四)、二世並木千柳襲名」と指摘され、「竹田治藏との合作では、両者はほぼ同格とみなされ、これらの作における翁輔の存在は重視されてしかるべきである」という。

(10) 郡司正勝校注・解題。日本思想大系『近世芸道論』所収、岩波書店。角書に「作者/式法」

(11) 『義太夫年表近世篇』によれば正本の一本は、「山崎・山本・長谷川版七行本」。「また翁輔の後序には、番付の口上とほぼ同じ内容の記述がある」という。疑問は残るが、これだけでは「入我園我入」が翁輔であるとは言えないだろう。

(12) 中村幸彦解題・肥田皓三校注、日本庶民文化史料集成第八卷「寄席・見世物」所収、一九七六、三一書房。「庭神楽」の説は宝暦六年刊『清神秘録』(続蕪石十種二巻、所収)より始まる。

(13) 荻田清「歌舞伎の中の「俄」点描」『歌舞伎研究と批評』9号、一九九二年六月。『大坂神事簿』は幕間にも俄を演じた。註(2)も参照のこと。

(14) 井上隆明『改訂増補近世書林板元総覧』(日本書誌学大系76、一九八八、清裳堂)に「役者評判記 天明合／並木正三一代断 同5合」。『三国舞台鏡』については注(8)と同じ。請求番号「ロ11／1344」

(15) 山本卓「菊屋安兵衛の出版動向」『近世文藝』71、二〇〇〇年一月。

(16) 廣瀬千紗子・正木ゆみ「当世芝居気質」作者考—半井金陵は並木宗治なり」『藝能史研究』一七四号、二〇〇六年七月。

(17) 〈本読み〉とは、稽古に入る前に、頭取部屋で狂言作者が役者たちに台本を読んで聞かせることをいう。寛政一三年刊『劇場楽屋図会』上巻、享和三年刊『同 拾遺』上下に詳しい。

(18) 「奈河亀輔」(服部幸雄執筆、日本古典文学大辞典、岩波書店)。なお、『攝陽奇観』巻三十八の記事は、次のように続く。

因云。本よみ会の権輿は宝暦十二年午之春、東武の作者堀越菜陽、浅草の寺内ニ於て興行ス。其後、明和四年亥ノ秋、深川汐浜ニて興行。大坂にては天明の初メ、奈河亀介、かぶき講釈と名付て本よみをなす。

本読会は江戸の興行が早い。正三の十三回忌追善本読会も亀

輔の「かぶき講釈」から発案されたと考えられるだろう。

(19) 「竹本三郎兵衛」(大橋正叔執筆、日本古典文学大辞典、岩波書店)。

(20) 『役者時習講』は、絵図部分が再編され、寛政一二年に『増補劇場一覽』として刊行。茶屋名が載る「道頓堀芝居側略図」「棧敷釣提灯之図」は『役者時習講』から踏襲されている。従来この図は『増補劇場一覽』所収とされて来たが、佐藤知乃「役者評判記『役者時習講』の諸本」(『近世中期歌舞伎の諸相』所収、二〇一三、和泉書院)の精緻な書誌調査によって、再編の全容が明らかになった。よってこの絵図は、寛政七年当時のものとみなすのが妥当である。

(21) 中村幸彦「宝暦明和の大坂騒壇—「列仙伝」の人々」『近世作家研究』一九六一、三一書房。のち中村幸彦著述集第六巻、所収。

(22) 井口洋「道頓堀の作者たち—「穴意探」をめぐる—」『翻刻・穴意探』、大谷篤蔵編『近世大阪藝文談叢』所収、一九七三、中尾松泉堂。ここに富山捲足とともに、近松東南の名前がみえる資料として、「並木正三述作之狂言追善本之説」もあげられている。

(23) 前出の追善浄瑠璃「南無三宝正参追善／極楽往来運奇初」の正本(松竹大谷図書館蔵)に「委しい事は筑後の芝居で、東南と麦鱗が書て置た穴探に有通り」と明記されている。この正本は井口論文以後に神津武男氏によって発見された。

(24) 註(2)参照。

(25) 寛保二年春刊(一七四二)『嶋陽采華』(洒落本大成第一巻、所収)、「役者時習講」両書ともに、その名が見えるので長く続いた茶屋であろう。蛇足ながら、『享保』以後 大坂出版

書籍目録』の「絶版書目」に「寛保二年五月、崎陽栄華（下略）」とあるによって、一部には「崎陽」を「崎陽」と誤まるようである。「嶠」は「島」と同字で読みは「トウ」。したがって「崎陽」は島之内でなければならぬ。ウイキペディアも「崎陽栄華」とするので、あえて注意を促す。

- (26) 宝暦七年二月一日『姫小松子日の遊』、九月晦日『薩摩歌妓鑑』、十一月十五日『昔男春日野小町』、同八年三月十三日『敵討崇禅寺馬場』、五月十五日『菅原伝授手習鑑』、八月朔日『蛭小島武 勇問答』、同九年二月朔日『日高川入相花王』に出勤。以上「義太夫年表近世篇」による。

- (27) 国立国会図書館デジタルコレクション、請求番号「851-109」

- (28) 高田衛『完本上田秋成年譜考説』「明和八年」「十一月、『風月外伝』（菊社波高著）の跋を執筆したか。」とあり、秋成の跋が全文翻刻されている。文中「後のふみには必あけつらう」は「あけつへう」、「道の残すへうもあらぬに」は「あらぬは」と訂正する。

- (29) 安永四年六月刊『古今俄選』。註(12)参照。

- (30) 安永二年刊『浪華今八卦』「桔梗卦」（洒落本大成第六巻、所収）には「一能あるものは用られずといふ事なし。足を能巻ものは則巻（ママ）足と、時の帝より官名を給ひ、是一ツの株を得る」とある。「時の帝」とは大袈裟だが、いづれにせよ、やんごとなき際より賜った話として伝説化したようである。

- (31) 中村幸彦「幕末大坂俄資料解題」日本庶民文化史料集成、第八巻「寄席・見世物」所収、一九七六、三一書房。

付記

井口洋氏には天理大学附属天理図書館綿屋文庫蔵「雷子改捲足改名祝賀句集」の存在を御教示戴き、野澤真樹氏の助力を得た。小稿の一部は二〇一七年二月二三日、京都キャンパスプラザにおける京都近世小説研究会で発表し、当日は貴重なご意見を頂戴した。あわせて感謝申し上げます。